

## ノーベル賞作家 トニ・モリスンを悼む

## 意識下の「他者化」強く照射

森本 あんり

講演録』に、日本語版読者向けの序文を寄せた。たまたま刊行直後に著者が逝去したため、遺作となった本書は注目を集め、9月に入ってもベストセラー記録を伸ばし続けて



トニ・モリスン 2008年12月  
© AngelaRadulescu

7月に刊行されたトニ・モリスン『他者』の起源 ノーベル賞作家のハーバード連続

いる。

\* \*

この成り行きは、出版社にとってはもちろん想定外である。本書の価値を見いだした編集者は炯眼(けいがん)だったが、題名の難しさや扱われている内容から、当初は社内の販売部から危惧の声が上がっていたそうである。それで、「せめてもう少しわかりやすい題に」と提案されたのが、現在の帯に記されている「人はなぜ『差別』をやめられないのか」である。ところが、この変更案は原著者側に拒否され

てしまった。最晩年の彼女が語りたかったのはそんなに表層的なことではない、ということだろう。

「他者化」とは、自他の間を線を引いて相手を差別することの意味するだけではない。人は、自分がそういう線引きによってしか確認できない存在であることをひそかに悟っている。その不確かさを覆い隠すために、いっそう他者を「異種」と印づけ、相手を非人間的に扱うことを正当化し、それでようやく自分の本来性や正常性を確認しているのである。そうでないと、自分自身が「よそ者」になってしまうからである。

\* \*

あっても、人はさまざまに重なる権力構造の中で生きていく。他者化とは、そういう人間に共通の認識様式なのだ。問題はそれが理性の明るみの背後で作用していることである。

モリスンの小説は、ふだんは無意識下に封じ込められていくこの作用に強烈な光を当てて、読者は自分の常住世界を揺さぶられ、意識の底にある共鳴板が不安に鳴り響いているのを感じ取る。だからその物語はどれも抗しがたい魅力をもってわれわれを虜にするのである。

在する。アフリカに住む人は、「ガーナ人」「エチオピア人」などそれぞれの国名で呼ばれるが、唯一の例外は南アフリカ共和国に住む人である。このことからしても、人種が科学的事実ではなく文化的構築に基づいていることがわかるだろう。

先日モトランプ大統領は、政権に批判的な非白人議員に向かって「国へ帰れ」と発言した。世界は、とりわけ日本は、好き嫌いかかわらず、今後も長くこの国つきあってゆかねばならない。両国の政治家たちが本書を読むことは期待できないだろうから、せめてわれわれ市民が互いに手をつなぎ橋を架けることを考えようではないか。

トニ・モリスン 1931~2019年。1993年、アフリカ系米国人作家として初のノーベル文学賞を受賞。『青い眼がほしい』『ソロモンの歌』ほか

本書がアメリカ国内の人種問題を起点としつつも、それに限定されない広がりをもつ問いかけとなっているのも、このゆえである。どの社会に

と同時に、本書はまさに今日のアメリカを輪切りにしたような生々しい現在をも写し取っている。著者によると、「黒人」はアメリカだけに存

(もりもと・あんり 国際基督教大学教授)